

パラリンピックのレガシー形成と コロナ禍の活動の可能性

1. パラリンピック無形のレガシー
2. コロナ禍での障害者スポーツ活動の可能性

藤田紀昭

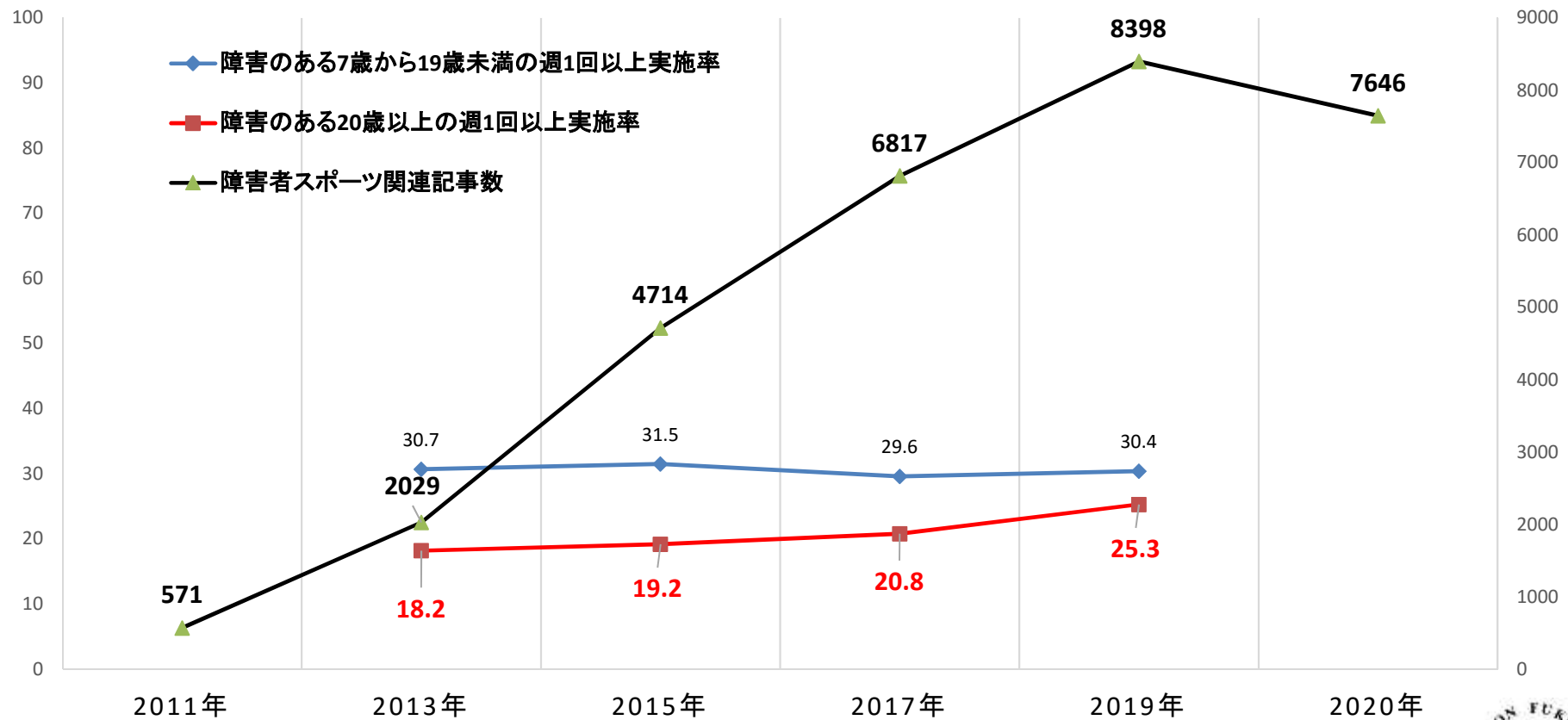
(日本福祉大学スポーツ科学部 教授)



1.パラリンピックの無形のレガシー

新聞報道量と障害者のスポーツ実施率

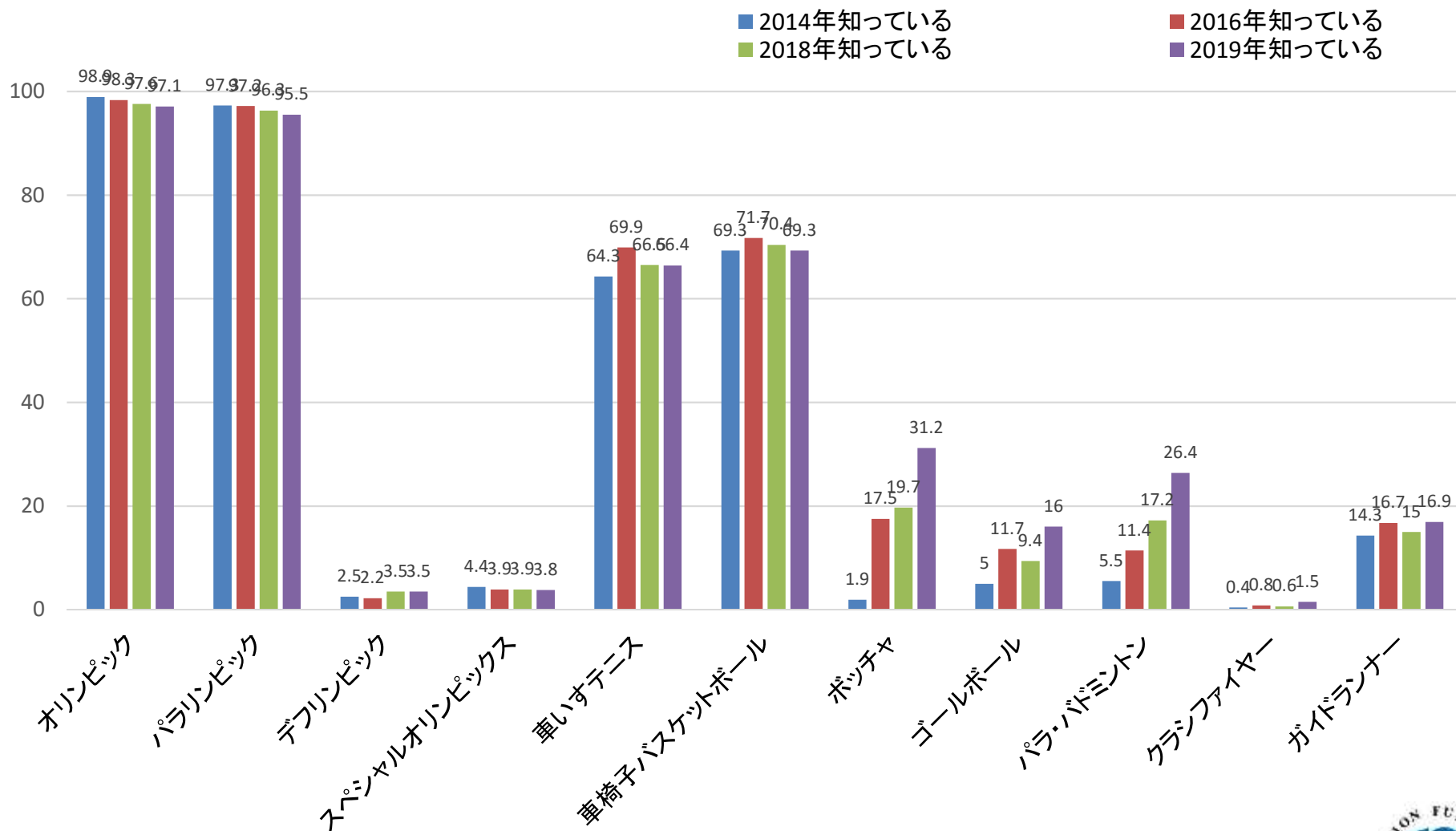
図1 障害者スポーツ関連新聞記事数と障害者のスポーツ実施率(週1回以上)
記事数: 朝日・毎日・読売データベースからパラリンピック、障害者スポーツ、パラスポーツで検索した数
スポーツ実施率: スポーツ庁調べ



パラスポーツの認知度（知っている人の割合）

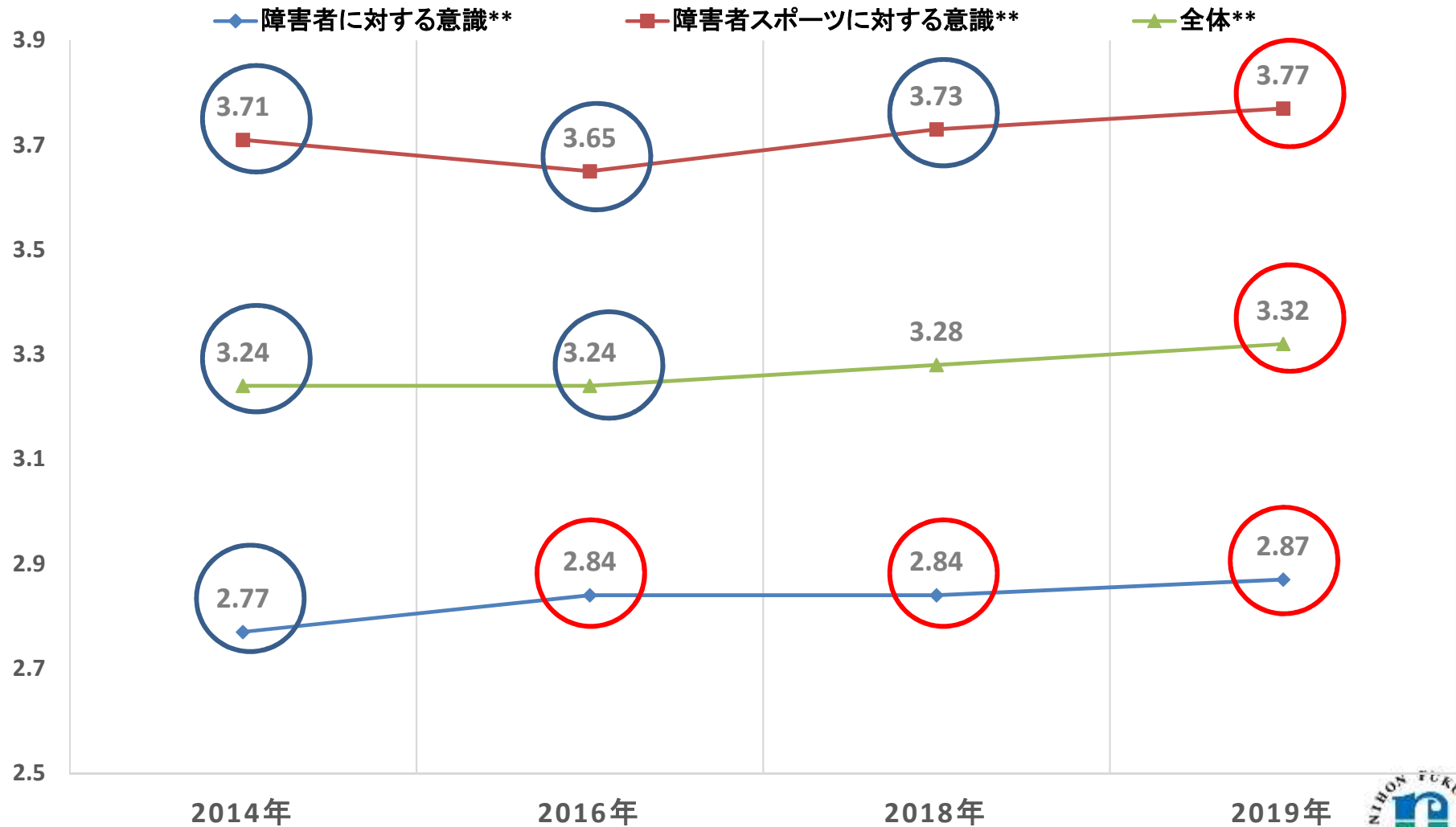
ネット調査サンプル2,066人

120



人々の意識(各5項目5件法)

障害者、障害者スポーツに対する意識の変化(2014-2019年)



これらから推察されること

- 国民全般がパラスポーツを知るようになった
- 障害者のスポーツ実施率はわずかに向上
- 障害者・パラ・スポーツに対する人々の意識はわずかにポジティブに（パラスポーツを見たり体験したことのある人のポイントは高い）
- パラリンピック後も継続的な施策が必要
- 知ることから次のステップへ

2 コロナ禍での障害者スポーツ活動の可能性

コロナ禍での活動の実態

- 多くの障害者施設では行事・教室的事業は停滞(A財団調査)
- 実施できているのはウォーキング、体操等(A財団調査)
- 全体として実施率はそれほど低下していない(スポーツ庁委託調査)
- 競技選手は工夫して練習継続(B財団調査)
- 各種大会は陸上競技・水泳以外軒並み中止
- 重篤化リスクが高い、医療関係者が多くかかわっていることも影響(あいちボッチャ)

コロナ禍での活動の可能性

- 福島県では緊急事態宣言下でWithコロナでの活動ガイドラインを作成→各地に普及（増子委員）
- 徹底した感染対策により、感染者が出ても濃厚接触者を出さない工夫、トレースできる工夫
- 障害者施設とリモートでつながり運動指導の計画
- オンデマンドによる指導も可能 コロナ禍でなくても有効

ご清聴ありがとうございました